

田中允編

未刊謡曲集

続二十一

古典文庫

田中

允編



朱子集

古典文庫

田 中 允

(芸名 穂高光晴)

能楽重要無形文化財総合指定保持者
幸流小鼓方

古典文庫第六一三冊

平成九年十二月二十日印刷発行

非売品

編 者 田 中 允^{マコト}

発行者 吉 田 幸 一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

集曲謡刊未
一十二続

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話〇三(三九一〇)二七一七
振替口座〇〇一九〇一九一四五九七番

三

次

凡例	五
各曲解題	七
本文	
永訣の朝	一五
女沙汰福王流系異本(月岡)	二五
維摩居士異本(維摩)	三四
行家車屋古活字本	四三
実朝改作本	四六

謡曲名寄一覽 中

シの部 五九

スの部 一三〇

セの部 一四五

ソの部 一六七

タの部 一七六

チの部 二三八

ツの部 二四一

テの部 二六〇

トの部 二六七

ナの部 二九二

ニの部 三二二

ヌの部	三四〇
ネの部	三四二
ノの部	三四五
ハの部	三五三
ヒの部	三九九
フの部	四一七
ヘの部	四四四
ホの部	四四六
マの部	四五九
追記・訂正	四八三

凡例

一、最近の新作と異本・改作本の追加曲計五番をこれまで通りの方式で解題付にて追加翻刻した。

二、前回に続き「謡曲一覽」中（「シ」から「マ」まで）を「謡曲一覽」上と同じ方式で収めた。

各曲解題

永訣の朝（えいけつのはる）宮沢賢治は妹とし子が自分に先立って二十五才で亡くなった日に「永訣の朝」「松の針」「無声慟哭」の三篇の詩を書いたが、それに基づいて、観世流準職分青木道喜師（一九五〇・三・三）が作詞作曲作曲舞をした新作。一九九六年十月二十五日、京都観世会館で沙羅の会主催で賢治生誕百年を記念して、シテ青木道喜、ワキ原大、笛杉市和、小鼓曾和正博、大鼓河村大、地頭片山清司の配役で初演された。その時の台本を青木師の御厚意で頂いたもので、それによって翻刻した。外に当日配られたパンフもあり、それにも本文が翻刻され、青木師の解説、坂本悠貴雄（ゆきを）関西大学教授のエッセイもあり、その中には本文中の特殊用語の現代語訳もある。力作であり、玄人楽師の作品であるからソツなく構成されているが、原詩に基いた難語が多く、賢治研究家以外には理解できない所も散見し、文意も通じ難い所もあって長文となって居り、今少し短

く切り詰め、一読でよくわかる平易な表現が望ましく思われる。

女沙汰(をんなざた)異本。別名：月岡・松沢？ 貞享三年(一六八六)版二百番外百番(謡

曲全集下巻・謡曲叢書第三巻に翻刻)所収曲の異本。①版本系には外に家蔵浅葱表紙

本・仙台本第二種がある。②福王流系異本には、家蔵樋口本・同紺表紙本(翻刻

底本)・大西本第一種・能勢本・観世宗家蔵観世本・国学院本第二種・同第四種・

井上本第一種・同第三種・同第四種・法政能楽研究所蔵五百番本・同蔵上杉本・

同蔵柳洞本・鴻山文庫蔵盛親本・吉田幸一氏蔵吉田本・伊藤正義氏蔵平松本・

福王宗家蔵福王本第二種などがあり、これらは柳洞本に小異がある外は皆ほぼ

同文。外に京都大学本第一種(月岡)・龍谷大学本・元文写本(関東大震災で焼失)・

鴻山文庫蔵了随本・大阪朝日新聞社旧蔵大阪府立図書館現蔵の朝日本第二種・

天理図書館蔵三百五番本・大聖寺前田家蔵大聖寺本などがあるが未調。しかし

これらはおおむね②系らしく思われる。『文安田楽能記』によれば、文安三年(一

四六)三月十七日田楽所演。『いろは作者註文』以下諸名寄所見。鴻山文庫蔵『番

外謡七十一番(仮題)』に女沙汰と題して本曲のワキの語り見ゆ。家蔵『大蔵流番

外間狂言(仮題)』に女沙汰と題して本曲の間狂言見ゆ。江崎本『脇語抄』の「松沢」は本曲のワキの語りにほぼ一致。

維摩居士(ゆいまこじ)異本。別名：維摩。『未刊謡曲集』十五所収曲(底本仙台北第一種)の異本。外に田安本・下村本(翻刻底本。外題維摩、内題維摩居士)があり、両者は殆ど同文。

行家(ゆきいへ)。『謡曲叢書』第三卷及び『未刊謡曲集』二十所収の同名曲の異本。鴻山文庫蔵車屋古活字本で翻刻。未調伝本に南部本を追加。未刊二十参照。**実朝**(さねとも)改作本。『未刊謡曲集』続五に翻刻した高浜虚子(一八七四・二三・一九五九・四・八)作の未演の同名曲の改作版。一九九六年(平成八年)十月二十六日昼夜の二回にわたって、鎌倉市大船の鎌倉芸術館ホールで初演された。観世清和宗家の御厚意で頂いた版本によって、不必要な傍訓を省略して翻刻した。版本の奥付には「平成八年十月二十六日初版発行。原作、高浜虚子。監修、観世清和。補綴、稲畑汀子。補綴演出、堂本正樹。節付、野村四郎、間狂言作、野村万蔵(前名万之丞)。謡本作製、石渕文栄。発行者、稲村(稲畑の誤植)広太郎。発行所、ホト

トギス社（住所省略）。印刷所、大盛印刷（住所省略）」とあり、更に「謄本実朝刊行について」と題して「ホトトギス創刊百周年記念行事として高浜虚子原作の新作能実朝を観世流にて初演するにあたり、関係各位の御協力の下この謄本が刊行されました。ホトトギス編集長、稲畑広太郎。平成八年十月」とある。

また初演当日配布されたパンフには、「ご挨拶―ホトトギス編集長稲畑広太郎」と題し、「高浜虚子は、俳句の世界においては、既に知られるところではありませんが、同時に兄の池内信嘉の影響で、能楽に深く興味を示し、自分で舞う事は勿論、いくつかの新作能を上梓しました。今回それらの作品の中から、虚子の縁深い観世清和御宗家、野村四郎先生をはじめとする方々の御尽力により実朝が初演される事は誠に慶賀の念に堪えません。この素晴らしいチャンスに、一人でも多くの方々にこの作品を御鑑賞頂きたく存じます」とあり、更に「作能にあたって―野村四郎」と題し、「虚子作実朝を舞台に実現する大任を受けました。作者は実朝の歌とその人物像の、いかなるところに魅かれたのか。そして現代における実朝の魅力は何か。そんなところに思いを馳せ、多くの方々の

ご協力を得て、作能いたしました」とあり、また「虚子作の能実朝の特色―堂本正樹」と題し、「俳人高浜虚子は、明治の文豪夏目漱石らとの交友から謡と能に親しみ、大正二年のホトトギス二百号記念文芸家招待能など、喜多六平太（先代）・桜間金太郎（弓川）・左陣（桜間伴馬）の豪華番組でした。泉鏡花・徳田秋声・岡鬼太郎・岡本綺堂・与謝野晶子・久保田万太郎・正宗白鳥・志賀直哉ら三百人が参会しています。松井須磨子もいるのが時代相。その虚子は鎌倉舞台〔現在のものとは違います〕などで何度か素人能も演じ、技術の知識にも長じていました。そこで幾つか新作能を作っています。奥の細道など再演を重ねていますが、この実朝は意外にも今回が初演です。鎌倉に遊んだ旅僧が銀杏の葉を掃く男に実朝卿の人柄を聞くと、この者こそ実朝の幽霊と名乗って消え、後銀杏の樹は割れて船となり、実朝の真の姿が現れて己の人生を物語り、舞います。割れて碎けて裂けて散った人生。実朝が中国に渡ろうと作った船は、海に浮かばずに砂浜に朽ち、彼の挫折のように思われていますが、実は浮かんで宇宙次元の世界に船出していたというのが、虚子の作意です。詩人は詩人を知り、実

朝を友として救済したのです」とある。

初演当日は午後一時始めと、午後五時始めの二部制であつたが、前記パンフによれば、前シテ童子、後シテ実朝、野村四郎。ワキ、旅僧、一部、高井松男、二部、宝生閑^{かん}。アイ、銀杏の精、野村良介。笛、一部、藤田次郎、二部、一噌仙幸^{ひさゆき}。小鼓、大倉源次郎。大鼓、柿原崇志^{たかし}。太鼓、一部、金春国和、二部、桜井均^{ひとし}。後見、観世暁夫、西村高夫、吉井基晴。地謡、浅井文義、上野朝義、鵜沢郁夫、清水寛二、竹前治房、上野雄三、木原康之、藤波重彦。原作、高浜虚子。補綴、稲畑汀子。補綴演出、堂本正樹。監修、観世清和。節付・作舞、野村四郎。協制作、宝生閑。間製作、野村万蔵。囃子作調、藤田大五郎、大倉源次郎、柿原崇志、金春惣右衛門。企画・主催、ホトトギス社。制作、稲畑広太郎となつている。

未刊謠曲集

続二十一

